

4

医学英語教育*1

(日本医学英語教育学会・日本脳神経外科同時通訳団の活動について)

伊達 勲*2

はじめに

グローバル化の時代にあって、医学分野における英語でのコミュニケーションや論文作成、あるいは国際学会でのプレゼンテーションの必要性は高まっている。医師国家試験に出題される英語問題数は増加しており、レベルも上がっている。日本医学英語教育学会では日本医学英語検定試験（医英検）、年次学術集会、Journal of Medical English Education、医学英語教育ガイドライン、英語論文セミナー等を通じて医学英語教育に取り組んで来た。

一方、日本脳神経外科同時通訳団は、日本脳神経外科学会学術総会などで外国人招待講演者や外国人留学生などに対して同時通訳を担当するユニークな補助組織で、すべて日本脳神経外科学会の会員で構成されている。活動は35年にわたっており、その存在は若手脳神経外科医の医学英語への興味を高め、ひいては医学英語教育に取り組む脳神経外科医を増やすことにもつながっている。

筆者は2014年より現在まで日本医学英語教育学会の理事長を、2003年から2019年まで日本脳神経外科同時通訳団の団長を務めてきた。本稿ではこれら2つの組織がどのような活動を行い、医学英語教育に貢献しているかについて紹介する。

1. 日本医学英語教育学会 (Japan Society for Medical English Education, JASMEE) の活動

(1) 活動の概略

医学英語教育の必要性が特に高まってきたのは1990年代後半である。医学部のカリキュラムの中にも医学英語を取り入れる大学が増えつつあった。そのような流れの中で、医学英語教育について討論し、実践に役立てようという機運が高まり、日本医学英語教育学会が1998年に設立され、浜松医科大学脳神経外科名誉教授の植村研一先生が初代理事長となった。植村先生は現役の教授時代から医学英語教育に熱心に取り組む、これまでに医学英語に関する著書¹⁾だけでなく大脳生理学の面から言語習得について分析した臨床研究を発表している²⁾。その後、理事長は大井静雄（東京慈恵会医科大学）、西澤茂（産業医科大学）、伊達勲（岡山大学）、といずれも脳神経外科医（大学教授）が務めてきた。

本学会の会員は半数が医師・歯科医師・薬剤師などの医療従事者で、半数が英語教員・翻訳者・言語学者などであり、ほとんどの会員が各大学等の教育機関で医学英語教育を担当している。年次学術集会では、教育に関わる多くの論文発表があり、それらが各教育機関での医学英語教育に反映される好循環が生まれている。

学会には役員会としての理事会・評議員会があり、医英検制度委員会、編集委員会、教育委員会、ガイドライン委員会などの各種委員会が機能して以下に示す活動を行い、日本における医学英語教育の発展に寄与している。

(2) 日本医学英語検定試験（医英検）

医英検は日本医学英語教育学会が主催し、応用級（3級）・基礎級（4級）の試験を毎年6月

*1 Medical English

*2 Isao Date 日本医学英語教育学会・日本脳神経外科同時通訳団

に、エキスパート級（1級）・プロフェッショナル級（2級）の試験を毎年1月に行ってきた。3級・4級の試験は全国の10会場程度で行っており、第14回となった2021年度は約850名の受験申込みがあり、過去最高となっている。受験者は医師（多くは研修医や若手）、医学生、看護学生、翻訳者など多彩で、毎年右肩上がりです。受験者が増えている。医師国家試験に出題される英語問題が増えてきていることも、医英検の受験者増に関係していると考えられる。また、合格し3級、4級の資格を持つことが、研修医にとって研修病院の選択に影響する場合もあるものと思われる。医英検の認知度が広がっており、受験者数はさらに増加が予想される。

医英検の難易度や内容についての概略は以下の通りである。

- ・基礎級（4級） 基礎的な医学英語運用能力を有するレベル（主な対象 医療系学生）
- ・応用級（3級） 英語で医療に従事できるレベル（主な対象 医師）
- ・プロフェッショナル級（2級） 英語での論文執筆・学会発表ができるレベル（主な対象 大学の助教以上）
- ・エキスパート級（1級） 医学英語教育を行えるレベル（主な対象 大学の講師・准教授以上）

各種試験では、問題の良否が識別指数で示されることが多いが、医英検の問題は3級・4級とも非常に識別指数が高く、良問との評価を得ている³⁾。グローバル時代に相応しい資格試験として、医英検を広めていきたいと考えている。

(3) 年次学術集会

年次学術集会では、2日間にわたって、各施設での医学英語教育の工夫に加えて、留学に関する情報、論文作成指導など、会員からの発表と討論がある。例年、特別講演あるいは教育講演、シンポジウム、ワークショップなどのセッションがあり、教育をする立場にとっても受ける立場にとっても多くの有意義な情報を得ることができる。留学に関するセッションでは医学生に参加してもらい特別に意見を聞いたり、論

文作成の分業化の話題ではメディカルライターから提案をいただくなど、本学術集会に参加することの意義が高まるようにしている。加えて、学術集会で発表した内容については、次に述べる機関誌に投稿することができ、研究成果を論文化することも可能である。

(4) 機関誌 Journal of Medical English Education

本学会では機関誌として Journal of Medical English Education (JMEE) を年3回発行している。原著論文に加えて特別講演、教育講演なども掲載され、医学英語教育の分野に大いに貢献してきた。年3回の発行の内、1回は年次学術集会の抄録・プログラム集となっており、あと2回が論文掲載号である。論文は英語でも日本語でもよく、厳重な査読・審査の上、掲載される。

医学英語教育に特化した雑誌として本誌はユニークな存在である。最新号の一つ前の号まではPDFで閲覧可能であり、今後も読者の広がりが期待される。

(5) 医学英語教育ガイドラインと総合医学英語テキストの発行

日本医学英語教育学会では、医学教育のグローバルスタンダードに合致するための医学英語教育ガイドラインを策定した⁴⁾。英語運用能力を vocabulary, reading, writing, communication の4項目に分類し、それぞれ minimum requirement と advanced requirement を提示した。これらに沿った教育が行える様に英語テキストを発行した^{5, 6)}。本テキストを利用して医学英語教育を行っている大学も多い。

(6) 医学英語セミナー

本学会では年に1回ないし2回、医学英語セミナーを開催している。このセミナーでは4名の講師に、医学英語論文の書き方や学会での英語プレゼンテーションスライドの作り方など、実用的な講演をしてもらっている。参加者はこれから論文を書いたり、国際学会で発表する若手医師や研修医が多く、本セミナーで得た知識

を元に積極的に論文発表していくことを期待したい。なお、2021年度からはより多くの方に参加してもらうことを目標として本セミナーをオンデマンド形式にする予定である。

2. 日本脳神経外科同時通訳団 (Japan Simultaneous Interpreters' Group in Neurosurgery, SIGN) の活動⁷⁾

(1) 活動の概略

日本脳神経外科同時通訳団が形成されたのは1987年である。全国学会ではシンポジウムが多く生まれ、外国人招待演者がシンポジウムに加わっているケースが多い。日本脳神経外科学会会員で構成される同時通訳団の役割は、彼らが日本人シンポジストの講演内容（日本語）を理解し、座長やフロアからの質問や討論（通常日本語）にスムーズに答えたり、コメントできるように同時通訳を行うことである。レシーバーをつけた外国人演者が日本語の質問内容を正しく理解し、的確に発言をしてくれるのは大きな喜びである。

(2) 研修会の様子と同時通訳のコツ

同時通訳団では毎年1泊2日で夏期研修会を開催し、新たなメンバーのリクルートを行っている。毎年10～20名の若手脳神経外科医の参加がある。正式な通訳ブースを4つ用意し、実際に使用するのと同じレシーバーを用いてトレーニングを行う。トレーニングの間はブース内が若手の悲鳴とため息で溢れ、trainerもtraineeも、ぐったりとなるが、英語学習への意欲が飛躍的に高まる2日間でもある。

医師が行う同時通訳にはいくつかのコツがある。【頭から訳す】文章をフレーズごとに分けて文章の頭から訳していく。【動画ではポインターを追う】ポインターを使って演者が説明を始めたなら、必ずポインターが指している内容を通訳する。【サイレンスを避ける】イヤホンから何も聞こえない、と言う状況を作らないようにする。訳せない単語に出くわしてメンタルブロックに陥っても次のフレーズをどんどん訳し、サイレンスだけは避けるようにする。これらの

コツを生かしながら同時通訳を行っている。

(3) 医学英語教育の面からみた同時通訳団の活動

同時通訳団が日常行っている英語の練習方法は一般的な医学英語教育の方法論にもつながる。具体的には日本語の論文を読みながらその一部をフレーズごとに英語に訳す「サイトトランスレーション」や、native speakerの英語のプレゼンテーションの英語を0.5秒遅れで影のように追いかける「シャドウイング」などを挙げることができる⁸⁾。

もう一点重要なことは、脳神経外科学会には同時通訳団があるために、脳神経外科医が英語に興味を持ち、各大学で医学英語教育に関わることが多いことである。日本医学英語教育学会の歴代の理事長4名はいずれも脳神経外科医であり、会員や役員にも脳神経外科医が多い。同時通訳団の存在は医学英語教育にも大いに貢献している。

まとめ

グローバル時代の医学英語教育に貢献してきた日本医学英語教育学会の活動を報告し、ユニークな組織として日本脳神経外科同時通訳団が果たしてきた役割を紹介した。両者の活動に深く関わってきた一人として今後も日本の医学英語教育の発展のためにこれらの組織の充実を図りたい。

■文 献

- 1) 植村研一．新訂 うまい英語で医学論文を書くコツ．医学書院，東京，2019.
- 2) 植村研一．脳のしくみから見た効果的外国語教育．*BRAIN and NERVE* 2021；**73**：211-5.
- 3) 日本医学英語教育学会．医学英語検定試験3・4級教本 第3版，メジカルビュー社，東京，2015.
- 4) 福沢嘉孝，一杉正仁，石井誠一，亀岡淳一，建部一夫，高田 淳，服部しのぶ・他．日本医学英語教育学会．医学教育のグローバルスタンダードに対応するための医学英語教育ガイドライン．*J Med Engl Edu* 2015；130-42.
- 5) 日本医学英語教育学会．医学・医療系学生のため

- の総合医学英語テキスト Step 1. メジカルビュー社, 東京, 2016.
- 6) 日本医学英語教育学会. 医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 2. メジカルビュー社, 東京, 2017.
- 7) 伊達勲. 日本脳神経外科同時通訳団の活動. 脳神経外科速報 2012; **22**: 224-7.
- 8) 伊達勲, 村井智. グローバル時代の脳神経外科—若手へのメッセージ—. 脳外誌 2021; **30**: 208-15.